様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０２７７

研究課題名（和文）イギリス近代の村の発展における景観の意義

研究課題名（英文）Picturesque in the Development of Modern British Village-scape

研究代表者
今村　隆男（IMAMURA, TAKAO）

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：９０１９３６８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀後半から始まったピクチャレスクの流行は観光や庭園などに大きな影響を与えたが、建築とくにコテージなどの小規模建築やその集合体である村も例外ではなかった。最初は庭園の装飾でしかなかったコテージは、ピクチャレスクの影響の中であばらやの「醜」の魅力の典型となったが、同時に産業革命やフランス革命を背景に、コテージをめぐる議論は労働者の住居の改善をも促していった。これらの影響の中で「ピクチャレスクな村とは何か」が議論され、理想の村の景観は、絵画的表層性や有用性・機能性のみならず、風景の内面つまりそこに住まう人々やその生活への視点を包摂しながら変容していった。

研究成果の概要（英文）：Picturesque movement, which started in the middle of the 18th century, had a strong influence on tourism, gardening, and architecture, especially small buildings such as cottages. In the beginning of the movement picturesque cottages were attractive as typical ‘disgust’ objects, while the cottages lived by the labourers, many of which were really ‘disgusted’, began to be improved. In the course was discussed ‘what is a picturesque village.’ The arguments included not only the ornamentality and the utility or functionality, but how the habitations in the village were harmoniously connected to the villagers’ living.

研究分野：英語圏文学・文化

キーワード：イギリス　ピクチャレスク　パターン・ブック　村　コテージ　風景

１．研究開始当初の背景

(1)18-19 世紀におけるイギリスの「村」に関する研究において、景観に正面から焦点を当てたものは少なかった。その中で、研究開始当初において出発点としたのは Malcolm Andrews (1989)と John Macarthur (2007)の研究で、前者はピクチャレスク時代に旅行記の中でイギリスの周縁地の村が理想化・美化して描写されたと指摘しており、後者は 18 世紀の村が醜さゆえに嫌悪の対象だったことが返ってピクチャレスク美学の関心を引いたという逆説を唱え、各々相反する面からの解釈を行っている。私はこれらの見解の二者択一ではなく、理想化と醜の魅力という両面から村の景観論議を考えるべきであると考えた。「村」の景観はまだ殆ど論じられていないテーマなので、関連する他の諸分野からの先行研究にも依拠しながら、それらを踏まえて論考を積み重ねることを軸にした。

(2) 本研究テーマの手掛かりとなったのは、「ピクチャレスクとワーズワス ― ヴァナキュラーの原点として」（イギリス・ロマン派学会第 37 回全国大会シンポージアム）であり、その中でワーズワスのコテージ・ガーデン観に 19 世紀以降現代にも継承されるヴァナキュラー(vernacular)尊重の原点があると私は主張したが、本研究ではそれを発展させてピクチャレスク美学が村単位の景観に注目し始めていたことをヴァナキュラー志向との関係から考えてみることに意義があると考えた。

２．研究の目的

イギリスでは産業・農業革命による近代化の中で田園部の村は次第に荒廃していったが、一方でその改革をめぐる動きも 18 世紀後半から始まった。本研究は、絵画に始まって建築様式へと続くピクチャレスク美学の流行がこの時代に重なることに注目し、建物や村全体の景観に関するピクチャレスクの議論がイギリスの村の改革・発展の過程にどのように関わったのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

研究対象とする文献の中に現れた、村に関わる言説を、18 世紀後半から 19 世紀半ばにかけての歴史・美学・文学・農業・建築などの分野との関係の中で分析・考察することによって、村の発展における景観論議の意義を考究した。景観に関しては、特に研究対象とする時代に流行したピクチャレスク美学の流れを主として建築史との関係で解明し、村落の発展との関係を明らかにすることを最も重視した。上記の時代は多くの政治・産業・農業革命が進展した激動の時代であったので、その流れの中での議論の変化を明らかにしながら進めるべく、ピクチャレスク前・後期、ロマン派期・それ以降の 19 世紀前半の 4 つの時期に区分して、段階的に研究を進めた。さらに、18 世紀半ばまでのグランド・ツアーを通してのイタリアの都市計画の影響や、19 世紀後半以降のコテージ・リヴァイバルまでをも視野に入れるようにした。研究資料に関しては、国内各地の大学図書館で探すほか、資料収集のための２回の渡英を行なった。また、その際にはいくつかの現場でフィールド・ワークも実施した。

4．研究成果

(1)村の景観の問題を考察するにあたって研究の前提としたのは、考察の対象とした時代がちょうどピクチャレスク美学の流行期に重なっており、ピクチャレスクとの関連を考察することが必然的に研究の要件になることだった。1770 年代からヴィクトリア時代の始まりの 1840 年前後までは、農業・産業革命が始まって進展していった時代であり、農村の景観は激変を免れなかったと考えられる。ちょうどこの時代に流行したピクチャレスクの美学は、見られる対象である実際の風景そのものの変化のみならず、風景を見る目の変化にも伴って、本質的に変わっていったことが文献の検証から明らかにできる。それは、形式主義から、客観的な観察に基づく scientific な見方、およびそれとは反対の主観的想像力による evocative な風景観への移り変わりであり、これら両者の調停の上にピクチャレスクは成り立つように徐々に変化していったと考えられる。そして、この変化の背景には、近代の始まりにおけるキリスト教育神学の弱体化を契機とした西洋の世界観の変転があったことも忘れてはならない。

(2)これまでの研究ではピクチャレスクの流行は 19 世紀の始めにはほぼ終焉したとする主張が支配的であったが、建築物や村関係の文献を調べれば、建築分野に限ればヴィクトリア時代にはいってもピクチャレスク美学の風景観は大きな影響力を持っていたことが明らかにできる。従って、村やそれを構成する小規模建築とピクチャレスクとの関係を明らかにすることは、本研究が対象としている時期を通して必須である。アーチャー(John Archer)はイギリスの小規模な建物に関する建築書を詳細に調べたアンソロジーを出しているが、そこでも「ピクチャレスク」をタイトルの一部に付けたコテージやヴィラのパターン・ブックはヴィクトリア時代に入るまで数多く出版されていることが読み取れる。その後もピクチャレスクなコテージに対する関心は衰えず、ジーキル(Gertrude Jekyll)やアリンガム(Helen Allingham)らの支持を経て現代の我々にまで引き継がれて来ている。

そこでまず、村の景観を構成するコテージなどの小規模建築の実際的な歴史的変化について調べた。1755年に出たジョンソン博士(Samuel Johnson)の『英語辞典』における「小屋、みすぼらしい住まい」というコテージの定義は貧困層の住居を表現したもので、その実態は当時書かれたゴールドスミス(Oliver Goldsmith)やクラッブ(George Crabbe)らのアンチ・パストラル文学が暴露している。これらの作品から、18世紀半ばまでの村落の多くの実際の景観はどのようなものだったのかはおおむね想像できる。その悲惨な状況を改善しようとする動きも同時に始まり、1765年にはケント(Nathaniel Kent)が『土地所有の紳士へのヒント』を出版して労働者用住居としてのコテージの改善活動が動き出し、バースの街の富裕層のための大規模建築の近代化で知られるウッド(John Wood)らの慈善的努力を経て、1793年に設立された農業委員会(Board of Agriculture)などが農村の窮状を救う手段の一つとして農民達の居住環境の改善運動を始める。

その一方で、スミス(J. T. Smith)の『田園風景について』(1797)のスケッチは有閑層に人気を博したが、そこに描かれたコテージの中には荒れ放題になったものが多くあり、読者層にとってはそのような住居は「醜」の魅力の典型で、風景の装飾の特殊な例として見られていたと推察できる。ピクチャレスクの美学理論は、18世紀末にアリスン(Archibald Aison)の観念連合心理学の影響などの中で主観的側面を強めていったが、「醜」に惹かれるのもその表れであると言える。またあばら家的コテージの人気は、ピクチャレスク趣味の中で廃墟とコテージは同一視されるべき面を有していたことも示している。このように、失われゆくコテージやコテージャーを含む田園風景への趣味的あるいは一種のノスタルジア的な見方と、その一方での悲惨な現実を踏まえた貧困層の住居の改革、これらはコテージへの関心を押し進める両輪だったことが証明できる。

間接的にコテージの改善を促したと考えられるものに、アンチ・パストラルとは正反対の一部の文学がある。ハチンソン(William Hutchinson)は、風景の中に点在するコテージの魅力に魅かれてその生活を自ら体験し、1775年にその体験を基にして創作した『コテージでの一週間』という物語を出版している。この作品の要点は、コテージャーは貧困とも贅沢とも無縁の理想的な人々とされて、その「中庸」の位置が賞賛されている点である。そこには、実際には当時のイギリス社会の中にはまれであったと考えられる「貧しいながらも幸せな」人々が意図的に創造されていることは明らかだが、結果的にはコテージャーの住環境の現実を改善する動きを後押しすることにもつながったであろうと思われる。しかし、注意すべきは、コテージャーたちが浮ついた野望とは縁がないという指摘はハチンソンが階級社会の秩序維持を支持していることを意味していることだろう。つまり、これらの文学やその影響下での労働者住居の改善は明らかな政治性を帯びたものであったと考えられる。

この流れは19世紀にはいって加速する。「醜」の魅力としてのあばら家や廃墟趣味は姿を消し、村を領する地主層にとって領民の住居の改善は責務となっていく。その契機となったのがフランス革命で、自国の貧困者の救済は国家の安定のための急務となっていったと考えられる。

(3)農村の人々の住居の改善運動を推し進めたツールとして、建築のパターン・ブックを見落としてはならない。小規模建築に関しては設計が容易であったこともあって多くのアマチュア建築家が参入し、18世紀末から19世紀前半にかけて様々なパターン・ブックが出版された。パターン・ブックは設計図面だけではなく、著者の方針を掲げた序文や、それぞれのプランに関する解説が詳しく、十分に文献資料として価値がある。これらは領主による領民の住宅改善に役立ったが、その中には一つ一つの建物だけではなく、その集合体である村に関する提案も見いだせる。村の新設計画は初期にはイタリアの影響を受けた領主によるものであったと考えられるが、やがてパターン・ブックの著者である中間層の手による現実的なものに変わっていった。また、パターン・ブックの提案は、新しい村の建設のみならず、旧来の村の改善にも影響した可能性がある。

パターン・ブックのモデル・ヴィレッジの典型的な例としてあげたいのは、プロー(John Plaw)の『装飾農場』(1795)の最後に置かれている計画案である。その図面では、村を十字に貫く道路の交差する中央に楕円形の広場があり、その真ん中に教会が建っている。現代のsemi-detached住居のルーツではないかと考えられる二軒一棟住宅と思しきコテージの背後には各々庭が付いており、ポンプのある中央の広場が直角に交わる二本の主道と共に「全体の統一性」を与えている。村のデザインは「シンメトリーと有用性を統合することを意図している」と書かれているが、これはプローが村の規則性と有用性の両方を重視して村の創設を考えていたこと、そしてそれが彼にとっての「ピクチャレスク」だったことを意味している。プローはまた、「練り土レンガ」(pisé)の使用を勧めているが、これは彩色しやすいという装飾性と安価であるという有用性に貢献しており、設計図面の進化と併せて建築の技術革新が進んだことを証明している。

新しい村の建設計画は18世紀半ばから存在した。このような、いわゆるモデル・ヴィレッジの具体例を辿った論考においてダーリー(Gillian Darley)は、その典型例とされ

てきたニューナム・コートニー(Nuneham Courtenay)などの左右対称型の画一的コテージは通常の自然発生の村が持つ「社会的断面(the social cross-section)」を欠くと言う。当時の文献を調べれば、この見方はギルピン(William Gilpin)などにすでに認められることが明らかになる。ギルピンはコテージの集合体である村を景観の一つの単位としてとらえ、その村のあるべき景観について意見を述べている。そこで彼は、領主が単独で村を作ってしまったことを批判し、村というものは「様々な考えを持った様々な人々」が様々な要素を統合しつつ、さらに生活する上で不可欠な「村の適切な付属物」が自ずから周囲に生じてくることによって実現する調和体であるとしている。

このことは、ピクチャレスクの理想に合致する景観が生み出されるには、多様な思考と時間の経過がもたらす必然性が前提となるということを意味している。これがギルピンの発言であることを考慮すると、ピクチャレスクは最初から形式主義の中に風景の有機的調和への視点を内包していたことになる。そして、この方向を推し進めたのがピクチャレスク後期の理論家プライス(Uvedale Price)である。

(4)ピクチャレスクの理想的風景の規範になったのは、言うまでもなく風景画である。その模範例としては、具体的には 17 世紀のイタリアで活躍した画家クロード・ロラン(Claude Lorrain)の名前が第一に挙げられるが、ギルピンやプライスの作品を読めば、意外に彼らがしばしばオランダの画家に言及していることがわかる。ギルピンが挙げている画家の中で注目したいのはライスダール(Jacob Izaaksz van Ruisdael)である。ライスダールは広大で静謐な風景も描いているが、一方で巨木や大滝など大胆でかつ細密な自然のダイナミズムも表現しており、後期のピクチャレスクへの影響が大きかったことがわかる。プライスの著作になると、村や村人への関心が言及する絵画に現れてくる。その代表が、これも同じオランダの画家オスターデ(Adriaen van Ostade)である。(クロードを含め、これら 3 人の画家はいすれも殆ど同じ 17 世紀の時代に生きた画家である)

このオスターデ賞賛にこそ、プライスのピクチャレスク観の独創性が現れている。オスターデの描くコテージは、スミスのコテージにも近い、住居としては荒廃しすぎたものが多い。そこには顕著なまでの「多様と錯綜」が見られ、その意味で非常にピクチャレスクな建築物だと言える。しかし、オスターデのコテージにはその荒廃した姿にも関わらず、スミスの描くあばらやとは異なり、活気ある生活を送る多くの住人が描き込まれている。そもそもオスターデの絵画には、建物の外観を描いたものよりも、その内部の住人の日常生活だけがテーマにされたものの方が多い。『ピクチャレスク論』第２版第２巻(1798)の後半で、コテージャー達の日常生活が見える村の風景にプライスがピクチャレスクの精髄を認める時、彼がオスターデの風景画を賞賛した理由は明らかとなる。研究当初において、私は本研究の枢要は 1790 年代前半の文献に見いだせると考えていたが、結局、さらに大きな変化が 90 年代の後半に起こって来たことが明らかになり、その代表的な文献がプライスの『ピクチャレスク論』第２版第２巻の大半を占める建築論である。この背景には、フランス革命の影響下での、イギリス側のコミュニティや労働者への見方すなわち社会観の変化があるものと思われる。つまり、フランス革命の進展に伴って、イギリス側の労働者観は徐々に変わって行ったのである。

『ピクチャレスク論』において村の有するピクチャレスクな魅力を論じるプライスは、村全体の包括的な景観の問題から、村を構成する具体的な建築物についても話題を広げている。彼がまず取り上げるのが教会である。教会は遠くからでも最も目立つ、不規則に配置された村のコテージの景観における「結節点」であるという視覚的な価値が述べられた後、それは村に住まう「あらゆる年齢や気質」のコテージャー達の日常生活や交友関係、先祖達にも連なる人生のサイクル等の「結節点」でもあるという説明がなされる。ここで語られるのは、多種多様なコテージャー達の生活の場としての村の重要な意義であり、村人達の幸せな生活が伴って初めて村の景観はピクチャレスクに成りうるというのである。この他、教会と並んで村を魅力的にするものとして、近くの小川やそれに架かる素人づくりの橋が取り上げられるが、これらは洗濯などを通して村人の生活に密着していることがピクチャレスクさを生んでいると語られる。モデル・ヴィレッジとは相容れない「長い時間をかけて作り上げられた集落(long established habitation)」、つまり自然発生の村の持つ特徴をプライスは尊重し、その景観こそがピクチャレスクの典型だと強調しているのである。

19 世紀にはいると、ガンディー(Joseph Gandy)がパターン・ブックの中で教会を中心に円形コテージを八方向に並べた「風の村(The Village of the Winds)」のプランを描いている。この村は、さらに八方向にと無限に拡大しうることが想定されている。つまり、この村は理想的コミュニティ、さらには理想国家のミクロコスモスであると考えられ、ガンディーの意識が社会改革をも念頭においたものであったことを立証している。これは、プライスが描いた田園部の理想社会をシステマティックに、近代的に立案し直したものであるとも言え、19 世紀に続々と登場して一部が実現してゆくユートピア共同体の引き金になったと考えられる。このように、村の改革は国家全体の改革を理想とするものでもあったと言える。

(5)村や村を構成するコテージ建築へのピクチャレスクの影響の流れを概観すると、最初は建物の背景としてピクチャレスク的風景を描いたプローのパターン・ブック第一作から始まり、次に建物そのものにピクチャレスクを適用したモルトン(James Malton)へと時代は進んだが、続いてピクチャレスクは村全体の構想にも関わっていったことが明らかになる。

先に触れたプローの第二作『装飾農場』における村全体のプランは、「全体の統一性」を重視して規則的な配置計画に沿ったものだった。ガンディーも独自色の濃い村落計画を提案していたが、専ら村の有する景観とピクチャレスクの関係に焦点が置かれているのがポーコック(W. F. Pocock)『田舎風コテージやピクチャレスク風住居のデザイン』(1807)である。このパターン・ブックの最後でポーコックも小さな村の計画を提案している。これは、領主が狩猟を専門にする使用人のために領内に建設するという想定で考案された建物の集合体であるが、著者は「快適でピクチャレスク」である「村のイメージ」を持つように全体をアレンジしたと述べている。この村では、それぞれが異なる外観の建物やその不規則な配置や、サイドスクリーンをなす大木や全体の奥行きを考慮した周囲の風景も、全体が典型的なピクチャレスク風に計画されており、村落計画にピクチャレスクの風景観が浸透していった様が具体的に明瞭に読み取れる。

18 世紀後半から 19 世紀の前半までの間、ピクチャレスク美学の影響の中で村の景観はピクチャレスクであることが追求された。しかし、ピクチャレスクとは何かは自明のことではなく、様々な立場からの議論が行われた。村の景観のピクチャレスクさは、初期の古典的理想を継承した定型的発想から抜け出て、風景画の模倣的発想を経て、その住民の生活と深く関わるものとして捉えられるようになっていった。村の景観をめぐる議論はそこでの住人の生活、つまり風景の内容的側面を抜きにしては語れなくなっていき、コミュニティのあり方をめぐる議論と結びついて、やがてユートピア観やあるべき国家像の追求に発展して行った。理想の村づくりの指針となったのは、コテージの改革が始まった産業革命開始時期以前のヴァナキュラーな住居やそこでの伝統的な生活である。

そして、これらのことはピクチャレスク美学が一般的に 19 世紀に時代遅れとされるようになる一方で、建築・住居の分野においてのみ存続していったこととも結びついている。ピクチャレスクは、風景の内容的側面の持つ、ラスキン(John Ruskin)の言うところの「モラル」や「崇高さ」と関わることで本質的に変容していったのであり、その象徴的な、そしておそらくは唯一の例が村や住居の景観だったと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①<u>今村隆男</u>
ウェイトリー『現代造園論』の風景
『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無、第 68(2)集、2018、pp.33-41.
http://dx.doi.org/10.19002/AN00257999.68(2).33

②<u>今村隆男</u>
ピクチャレスクのエネルギー ― U. プライスの『ピクチャレスク論』を中心に ―
『イギリス・ロマン派研究』（イギリス・ロマン派学会）、査読有、第 41 号、2017、pp.1-12.

③<u>今村隆男</u>
R.P.ナイト『風景』とピクチャレスク
『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無、第 66 集、2016、pp.1-16.
http://dx.doi.org/10.19002/AN00257999.66.1

④<u>今村隆男</u>
メイスン『英国庭園』の多様性
『和歌山大学教育学部紀要』（人文科学編、和歌山大学教育学部）、査読無、第 65 集、2015、pp.37-50.
http://dx.doi.org/10.19002/AN00257999.65.37

〔学会発表〕（計 2 件）
①<u>今村隆男</u>
ピクチャレスクのエネルギー
イギリス・ロマン派学会全国大会、2016 年

②<u>今村隆男</u>
建築とピクチャレスク
関西コールリッジ研究会、2014 年

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
今村　隆男（IMAMURA, Takao）

和歌山大学・教育学部・教授
　研究者番号：９０１９３６８０

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし

(4)研究協力者
　なし